
藤の華・紫の影

夢未

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

藤の華・紫の影

【Nコード】

N3343I

【作者名】

夢未

【あらすじ】

紫音には誰もが憧れる3つ年上の姉藤花がいる。華やかな姉に比べ平凡な紫音には姉の存在がコンプレックスとなっていた。高校に入学した紫音は2年の貴輝に一目ぼれ。比べられることを覚悟の上で姉がかつていたテニス部に入部した。

ある日貴輝から告白される紫音。姉じゃなく自分を選んでくれたことに戸惑いながらも嬉しく思う紫音。二人は付き合いだすのだが…。

【1】前編

（私を見て。誰かの身代わりでなく、私自身を見て）

*

*

*

「紫音、今日も部活見学行くでしょう？」

放課後になったとたん、後藤歩ごとうあゆみが嬉しそうな顔をして寄って来た。

「うん。今日はどこ見に行こうかなあ」

みずはらしあん
水原紫音は席から鞆を持って立ち上がりながら言った。

高校の入学式から早五日が過ぎようとしている。

紫音と歩は中学から一緒に友達だ。縁あって高校でも同じクラスになった。

中学時代、二人は別々の部活に所属していたが、高校は一緒に部に入ろうかと相談しているところである。

「それなんだけど、テニス部行かない？」

「テニス？ ……ごめん。私テニス部だけには入りたくないの」

紫音は困ったように俯いた。

「……もしかしてお姉さんのせい？」

「……………うん」

紫音には三つ上の姉、藤花^{ふじか}がいる。

彼女は中学時代高校時代ともにテニス部でキャプテンを務めるようなリーダーシップ抜群の生徒で、信頼も厚かった。高校時代は関東大会まで出場した経歴もある。

それだけではない。

モデルかと言われるほどの顔とスタイルの持ち主でもあり、とにかく華やかで目立つ存在だった。

それにひきかえ、紫音は顔こそ同じ母親似でどことなく似ているものの、藤花の持つ華やかさとは程遠い、控えめな大人しい少女だった。

歩は藤花を一度も見たことがない。

しかし彼女の存在は、彼女が卒業した後も伝説のように語られていた。

その姉といつも比べられてきた紫音は、表面上は笑顔で答えつつも、心の中では惨めな思いが渦を巻いていた。

だから同じ高校には行かないつもりだった。

しかし両親の勧めもあって、結局藤花と同じこの城南学園に入学したのだ。

「見に行くだけ行こうよ。入部するわけじゃないんだからさ」

「でも……」

「紫音は見てみたくない？ 城南の光源氏って呼ばれてるテニス部の有名人」

「城南の光源氏？」

「うん。二年生の男子テニス部員、こうさかたかき香坂貴輝先輩！」

歩はワクワクした思い全開で言った。

「二年生でエースだよ。しかもテニスだけじゃなくて他のスポーツも勉強も、何でもこなせちゃうすごい人。でもってすごい格好いいんだって」

こんな非の打ち所のない人が世の中にいるのだろうか。姉の藤花でさえも数学が苦手だったのに、と紫音は思った。

そして見たくなった。

「歩ちゃん、私も見たい。城南の光源氏！」

（見るだけ。見るだけだから。テニス部には近づかない方がいいのは分かってるけど、一度だけ……）

紫音は歩に感化されたのか、まだ見ぬ城南の光源氏と呼ばれる少年に胸をときめかせるのだった。

二人がテニスコートへ行くと、すでにフェンスの周りに人が集まりつつあった。

見学目的の一年生はもちろんのこと、他の学年の女子生徒も混じっている。

彼女らの目的はもちろん城南の光源氏。その姿と華麗なプレーを見ようと集まっているのだ。

テニス部員はウォーミングアップでランニングした後、軽い打ち合いに入っていた。

紫音の瞳に一人の少年が映った。

明らかに周りとは違う雰囲気を持つ少年。

（何か品のある人。……高貴というか）

「ほら、たぶんあの人次よ」

歩が指した方は、たった今紫音が見ていた少年を示していた。

「あの人が城南の……光源氏」

紫音は茫然と呟いた。

納得できてしまった。

一人異彩を放つあの少年の持つ品格、姿。

平安の雅な線の細い美男子というわけではない。切れ長の瞳と野生の狼のような鋭さを持ちながらも品がある人。そして八頭身の立ち姿。

美少年というより美青年である。

紫音は貴輝に釘付けになってしまった。

（もっとずっと見ていたい）

紫音は胸の鼓動の高鳴りを感じていた。

——目ぼれ。

一瞬にして恋に落ちてしまったのだ。

「步ちゃん、私テニス部に入る」

紫音は貴輝に瞳を奪われたまま、ポツリと呟いた。

「え！？　だって紫音、テニスだけはやだって……」

紫音の意外な言葉に、歩は紫音の心がどうして急に変わったのか分からなかった。

「あの人のこと、もっと見ていたい」

「紫音、あの人ってまさか」

「……うん」

姉と比べられたくはない。けれどそれ以上に恋する気持ちが勝つのだ。

藤花ならともかく、こんな自分の想いが通じるなんて、紫音は思っ
てなかったし期待もしていなかった。

ただそれでも毎日貴輝の姿を見たいと思ったのだ。

貴輝の姿が瞳に映る。それだけで紫音には充分に思えた。

「そっか。じゃあ私も入ろつと。善は急げってわけじゃないけど、
これから入部届出しに行こうよ」

歩は言つと、紫音の手を引っ張って女子テニス部の部長を訪ねた。

「そう。じゃあ今日は仮入部つてことで見学してつて。入部届は顧
問の先生が持つてるから後で貰つて
ね。とりあえず部活日誌に名前だけ書いてもらおうかな」

女子部長は日誌を取つてくると、それとペンを二人に渡した。

勧められるまま二人は名前を書いて渡すと、部長はある一点を見
て紫音の顔をじつと見た。

「水原つてもしかして……」

部長の考えていることが紫音にはすぐ分かった。

「はい。水原藤花の妹です」

「やっぱり藤花先輩の妹さん！ 似てる似てる。テニスもできるの
？」

興味津々の部長に紫音は俯く。

「……いえ、初心者です」

「中学では何してたの？」

「きゅ……弓道をやっていました」

意外そうな部長の顔。

比べられるのは覚悟の上とはいえ、紫音はやはり姉の絶大な存在を感じてしまう。

「理江部長、この子達りえ新人部員？」

部長の横からひょっこり顔を覗かせた男子生徒、みやざきまさと宮崎将斗。

「将斗くん、この子藤花先輩の妹だって」

「えっホント!? おーい貴輝、こっち来いよ。藤花先輩の妹が来てるってさ!」

二つ離れたテニスコートで練習していた光源氏・貴輝を大声で呼ぶ将斗。

その声に貴輝のみならず、テニス部員が次々に集まってきた。

（私、見世物じゃないのに……）

皆の視線に晒され、紫音はますます俯く。

「ほらほら皆、練習練習！」

紫音の様子に、将斗が部員達を追いつ返す。

「お前が大声で呼ぶからじゃないか」

貴輝がやって来た。

「すまん、つい……」

「皆、練習再開だ。行った行った」

名残惜しそうに散っていく部員達。

紫音は憧れの人を目の前にして、茫然としてしまっていた。

将斗が紫音の肩に手を置いた。

紫音は我に返り将斗を振り返る。

「えーっと名前何だっけ？」

「水原……紫音です」

「ごめんね、紫音ちゃん」

将斗の優しそうな笑顔に、紫音にも笑みが戻った。

「俺は宮崎将斗、二年生。で、こいつは香坂貴輝。同じく二年。ヨ

ロシクね」

「はい。宮崎先輩、香坂先輩、部長、初心者ですがよろしくお願ひします」

紫音が挨拶をすると、横にいた歩も一緒にお辞儀した。

「うちの部は名字じゃなくて名前で呼び合ってるんだ。皆仲良く。これうちの部のモットーね」

将斗が付け加えるように言った。

「はい」

紫音は思い切ってテニス部に入ってよかったと思った。

姉のことを除けば、部員達も皆仲良さそうで楽しそうだったと思った。

そして姉の存在があったから、貴輝に自分の存在を知ってもらうことができたのだ。

姉の存在があったから……。なければ……。

それを思うと紫音の胸の内は複雑だったのだが。

ただこれだけははっきり分かっていた。

——貴輝を近くで見たいられる、言葉を交わすこともできる。それを喜んでいゝ自分の心を。

*

*

*

衣更えの季節を迎えた。

紫音と歩は今日も部活に励んでいる。

初めこそ藤花の妹と騒がれはしたが、今ではあまりに姉と違う紫音に興味を抱くことはなくなっていた。

「紫音ちゃん」

校舎の陰で休憩中の紫音に、将斗がタオル片手に近づいてきた。

紫音にとって気軽に話せる将斗の存在は頼りになる先輩そのものである。

「将斗先輩も休憩？」

「そうだよ。今日も熱いね」

将斗はそう言うと、紫音の隣に座り込んだ。

「紫音ちゃんってさ、筋いいよね。初心者にしては上手いよ」

将斗の言葉に紫音ははにかむ。

「……私、何でも何とか人並み程度にしかできないから」

「それってすごいことだと思うけど？」

紫音は首を横に振る。

「平均的にしかできない人より、何か一つでも得意なものがある人の方が強いし魅力あると思う。私とお姉ちゃんがまさにそれ。例えば勉強にしたって、お姉ちゃんも文系の科目は全国模試でもいい線いってたのに、理数系はてんで駄目だったもん。私はどれも平均で強みなし。その点貴輝先輩ってすごいすよね。トップクラスになれるくらい何でもできちゃうんだから。それにあのルックスだし」

紫音は何度思ったことだろう。

なぜ自分は藤花ではないのだろう。なぜ自分には誇れるものがないんだろう。もし自分が藤花だったら、貴輝は振り向いてくれたかもしれないのに……と。

「紫音ちゃんのコンプレックスは藤花先輩ってわけか。俺の貴輝に對するものと似てるな」

呟くように言った将斗の顔を紫音は意外そうに見つめた。

将斗が貴輝に対してコンプレックスを抱いているとは微塵も思っていないかった。

将斗も貴輝には及ばないものの、人並み以上に何でも器用にこなすし、ルックスだってかなりのものである。

生徒の中には貴輝の光源氏に引つ掛けて、将斗のことを源氏のライバル・頭中将と呼ぶ者もいるくらいだ。

その将斗からこんな言葉を聞いて、紫音は驚いていた。

将斗は苦笑いした。

「俺、あいつとは中学から一緒なんだけど、今まであいつに勝ったこと一度もないんだぜ。何か一つでもいいから一度あいつを負かしてみたいよ」

「ライバルが貴輝先輩って大変そう……。頑張ってね」

「ああ。……こんなこと話したの、紫音ちゃんにだけだからな。他のヤツラには内緒だぜ？」

紫音は笑顔で頷いた。

——その日の帰り。

紫音は一度は学校を後にしたものの、明日の英単語の小テスト用のテキストを部室に忘れ取りに戻っていた。

テキストを手に部室の鍵を閉めていると、数部屋おいた先の男子の部室から貴輝が出て来た。

貴輝も紫音にすぐ気づく。

「あれっ今帰り？ 遅いね」

声を掛けてきた貴輝を直視できず、どきまぎする紫音。

「は、はい。部室に忘れ物しちゃって。貴輝先輩こそ練習とつくに終ってるはずじゃ……？」

「俺は居残り練習。ちょっとやっておきたいことがあってね。一緒に帰ろう。送るよ」

貴輝の申し出に、紫音は飛び上がりたくなるくらい喜んだ。

こんな風に話せるだけでも嬉しいことなのに、一緒に帰ろうと言ってくれたことはまるで宝くじで当たりした気分だった。

もう二度とないことかもしれない。

この時間を紫音は心の中で大切に抱き締めていた。

貴輝の隣を歩きながら、紫音はそつと彼の精悍な顔を見上げる。

（先輩、私に時間をくれてありがとう）

一生の宝物だと思った。

もうこれ以上高望みはしない。これで充分想いは報われたと思った。

「紫音ちゃん。……いや紫音」

貴輝に呼びかけられた紫音は、一瞬ドキツとして歩みを止めた。

貴輝がちゃん付けでなく、名前を呼んだからだ。

歩みを止めた紫音に、貴輝も向き直る。

紫音は貴輝から目を逸らすように俯いた。

何かいつもと違う貴輝の真面目な表情を、まともに見ていられなかったのだ。

「俺と付き合って欲しい」

頭の上から降ってきた貴輝の艶やかな低い声に、紫音は訳が分からないようにキョトンと彼を見上げる。

「先……輩？」

（今何て言っただの……？）

貴輝は自分を見つめてくる紫音の長い髪にそっと触れた。

「君のこと、もっと知りたいんだ」

貴輝が告げたことに、紫音は嬉しさよりも「どうして自分に？」という思いを強く抱く。

何の取り柄もない自分のどこが気に入ったのだろうか。姉のように誇れるものが何もないのに。

「先輩、私でいいの？ 私、お姉ちゃんとは全然違うよ？」

紫音は自信のなさに俯いて言った。

「藤花先輩じゃなく、紫音のことが知りたい。初めは藤花先輩の妹

って聞いて気になった。けれど今は君自身のことを知りたいと思ってる」

貴輝は毎日紫音に目を向けていた。

藤花の華やかさはないが、紫音には心安らぐ穏かな空気を感じていた。

彼女の笑顔を見るだけで、自分まで微笑んでしまうような優しい雰囲気。

花に例えるなら藤花はまさに赤薔薇。紫音はかすみ草といった感じだ。

「俺は紫音と付き合いたいんだ」

姉ではなく自分を見てくれた貴輝の想いを、紫音は今度は素直に嬉しいと思った。

「はい。よろしくお願いします」

軽くお辞儀をして貴輝を見上げると、彼は優しい笑みを零していた。

「よかった」

貴輝は言つと紫音の手を握った。

「帰ろっか」

紫音はそつとその手を握り返した。

*

*

*

貴輝と紫音が付き合いだしたことは、あつという間に学校中に知れ渡った。

貴輝は何といつても常に注目されている人物。

城南の光源氏とは呼ばれていても、本物の光源氏のようにプレイボーイではない。

今まで貴輝が誰かと付き合ったというのは噂にすら上がっていなかったのだ。

その貴輝に彼女ができた。

相手はあの藤花の妹ということで、紫音まで注目されるようになっていた。

まるで肩書きのように「藤花の妹、藤花の妹」と言われ続け、紫音は姉の存在に押し潰されそうだった。

今までも姉と比べられてきたが、今回はその比ではない。

藤花ならともかく、何であんな平凡な子と…と何度も耳にしていた。

貴輝と付き合うことは、紫音に藤花の存在の大きさを再認識させた。

貴輝が自分に言ってくれたことを信じていないわけじゃない。

しかし周りの声が徐々に紫音の心を脅かし始めていた。

（私のどこを好きになってくれたの？）

紫音は心の中で何度も不安げに呟いた。

ただそれでもどんなに辛くても、貴輝の言葉を信じている限り、紫音は貴輝の傍にいたいと思った。

彼の口から別れの言葉を聞くまでは隣にいたい。いさせて欲しい。

（それ以上はもう望まないから）

紫音は押し潰されそうな恋心をそっと抱き締めるのだった。

ある日の部活後の部室内で、二年生の先輩が紫音に話しかけてきた。

貴輝と付き合い始めたことは、少なからず部内にも影響をきたしている。

貴輝目当てでテニス部に入った者もいた。

今までは貴輝に特定の彼女がいなかったから、周りがワイワイ楽しむだけだった。

しかし彼女ができたことで、部内にも波風が立ち始めていたのだ。

そしてこの話しかけてきた二年生も貴輝に憧れる一人。

「どうして貴輝くん、紫音ちゃんと付き合うことにしたのかなあ？」

「え……あ、あの」

敵意を感じた紫音は言葉に詰まった。

それを見た歩が紫音の手を引く。

「お先に失礼します、先輩。行こう紫音」

「う、うん」

紫音も早くこの場から離れたかった。

しかし先輩は紫音に衝撃の一言を投げかける。

「貴輝くんが本当に好きなのは藤花先輩だって知ってる？」

紫音は先輩を振り返った。

心の片隅に思っていたことを直球で投げかけられて、不安な思いが全身を駆け巡った。

「テニス部内じゃ二人の仲は有名だったのよ。交際はしていなかったけど、皆相手があの藤花先輩じゃ仕方ないって思ってた。だから貴輝くんがあなたを選んだなんて信じられない。あなたは藤花先輩の身代わりでしかないのよ！」

紫音は何も言い返せなかった。

ただ唇を噛み締めて耐えることしかできなかった。

「先輩、紫音を傷つけるのがそんなに楽しいですか？先輩なら言っていることと悪いことの区別くらいできるはずです！」

歩は言い返すと、紫音の手を引いて部室を出た。

「大丈夫？ 気にすることないからね」

紫音は頷くことしかできなかった。

（私はお姉ちゃんの身代わり？）

先輩の放った言葉が紫音の胸に深く突き刺さっていた。

貴輝の言葉を信じようと思う心が崩れそうになるのを、紫音はすんでで抑えていた。

その日は何とかそれで事を終えることができた紫音だったが、数日後の古典の授業で紫音は更に苦悩することになってしまった。

教科書は『源氏物語』の『若紫』に入った。

先生が『源氏物語』のあらすじを説明する。

紫音は『源氏物語』の本文を読んだことはなかったが、漫画で話を知っていた。

話の内容を思い出した時、紫音の心に藤花の身代わりという言葉が蘇った。

『源氏物語』の登場人物に、貴輝と藤花と自分が重なって見えたのだ。

貴輝を光源氏とするなら藤花は藤壺の宮、自分は紫の上だと。

光源氏は父・天皇の妻である藤壺の宮を恋慕していた。藤壺の宮も天皇の妻でありながら光源氏を密かに思っていた。藤壺の宮の面影を追い求めるように彼は多くの女性と契りを交わしていく。藤壺の宮を忘れられない彼は彼女と血縁関係のある紫の上と関係を持つ。しかも紫の上は藤壺の宮によく似ていた上に、小さい頃から光源氏の元で育ったためまさに彼の理想の女性に成長していた。それでもなお藤壺の宮を忘れられない光源氏の想いを、いつしか紫の上も気づいていた。自分に他の誰かを重ねてみると。

（でも最後光源氏は自分が本当に愛していたのは紫の上自身だと悟るのよね）

でも自分は……と紫音は思う。

（私は紫の上みたいに魅力的な女性じゃない）

だからもし姉の身代わりに自分を見ているのであれば、それ以上に見られることは決してないのだと思った。

（もし貴輝先輩が本当はお姉ちゃんのことを想っていたら……）

紫音の胸を不安の渦が巻く。

(でも、それでもいいの)

紫音はただ貴輝の傍にいたかった。

たとえ姉の身代わりであろうと、たとえ自分には振り向いてくれなくとも、それでも貴輝の傍にいたかったのだ。

それ以上は望まない。ただ傍にいらられるだけで紫音には充分に思えたのだった。

* * *

姉の存在に脅えつつも、紫音は表面上は何事もないように貴輝の隣で振る舞っていた。

ただ毎日が流れるように過ぎていく。

この日々がいつまでも続いて欲しいと紫音は願う。

「紫音、明日は久々に部活もないし遊びに行かないか？」

土曜日の部活帰り、貴輝が紫音の隣を歩きながら誘ってきた。

紫音は笑顔で頷く。

二人でどこかへ行くのは初めてなのだ。

「どこがいい？ 映画？ それとも遊園地？ 紫音の好きな所でいいよ」

「先輩はどこ行きたい？ 私、貴輝先輩と一緒にどこでもいいよ」

紫音には決められなかった。優柔不断なのだ。

「じゃ、今回は遊園地に決まり！」

貴輝もそれを分かっているから自分からリードする。

紫音の顔を見たら、何となく遊園地って感じがした。

「うん。明日が楽しみ！」

初めてのデートに紫音の胸は高鳴る。家に帰ってからもそれは続き、明日は何着て行こうとか、何もって行こうとかあれこれ考えるのも楽しいものだった。

そして気分の高まりに、紫音はなかなか寝つけない夜を過ごしたのだった。

翌日は晴天。

紫音の心も自然と澄み渡る。

初めて二人で過ごす時間は、紫音を満足させるには充分だった。

自分に微笑みかけてくる貴輝の優しい表情に、紫音は宝物のようなこの瞬間を大切に胸に刻みつけていた。

二人はいくつか乗り物を乗った後、休憩がてらにベンチに腰を下

ろす。

「はいっ」

貴輝が紫音にコーラの入った紙コップを手渡す。

「ありがとう」

貴輝がおごってくれたコーラを、紫音は一口二口飲む。

暑い日に炭酸が気持ちよく喉を通っていく。

貴輝もアイスコーヒーを飲んだ。

「はーっすつきりした」

冷たい飲み物が二人のエネルギーを補充していく。

流れる穏かな時間。

貴輝の何気ない言葉や仕草を見ているだけで紫音は幸せだった。

「次、何乗る？」

アイスコーヒーを飲みほした貴輝が紫音に意見を求めてきた。

ずっと貴輝に任せっ切りだった紫音だが、今日叶えたい思いがあった。

「貴輝先輩、……メリーゴーランド乗ってもいい？」

遠慮がちに言った紫音に、貴輝は優しい笑みを浮かべ頷くと立ち上がった。

「行こう」

貴輝が紫音に手を差し伸べる。

自分の思いをごく当たり前のように受け入れてくれた貴輝の手を、紫音は喜んで握った。

紫音はメリーゴーランドが好きだった。まるで夢の中へいざなってくれる気がしていた。

小さい頃は遊園地へくると必ず乗ったものだ。しかし成長するにつれ、子供じみたヤツだと思われたくなくてここ何年かは周りから眺めることしかできないでいた。

貴輝ならそんな自分の願いを叶えてくれそうな気がした。

貴輝の前でなら素直な思いを口にできると思った。

そして貴輝は紫音の願いを聞き、叶えてくれたのだ。

二人は隣り合わせの白馬に乗った。

紫音は流れる景色と隣で自分に穏かな笑みを向ける貴輝とを交互に見ながら、至極の幸せを噛み締めていた。

貴輝もまた、無邪気に瞳を輝かせる紫音の姿に心を和ませていた。

紫音は満ち足りた思いでメリーゴーランドを後にした。

「貴輝先輩、ありがとう。付き合ってくれて」

紫音は一緒に乗ってくれた貴輝に感謝した。

まさか一緒に乗ってくれるとは思ってなかった。外で待っていてくれるものだと思っていたのだ。

そのことが嬉しさを倍増させた。

「俺も楽しかったよ」

貴輝は言つと紫音と手を繋いだ。

「メリーゴーランドって紫音のイメージだな」

「えっ？」

「何かほんわかするっていうか、和ませてくれるっていうか」

貴輝の言葉に紫音は、貴輝が自分をどんな風に見てくれているのか垣間見れた気がした。

その言葉はちゃんと自分自身を見てくれていると告げられたようで嬉しいものだった。

「紫音ってさ、絶叫系苦手だろ？」

「どうして分かったの？」

「やっぱり。そうだと思ってあえてそれ外して乗ってたんだけど。よかった、間違ってたなくて」

貴輝は安心したように言った。

（貴輝先輩、私のこと分かってくれてるんだ）

しかし次に貴輝が放った言葉は、紫音の心を不安へと導く。

「姉妹っていつでも全然違うよな。藤花先輩は絶叫系大好きだったから」

「……貴輝先輩、お姉ちゃんと来たこと、ある……の？」

紫音の声のトーンが落ちる。

その様子に貴輝は紫音の不安を悟る。

「二人で来たわけじゃないよ。テニス部全員で送別会の時来たんだ」

「そう……なんだ」

ずっと思い出さないようにしてきたことが、抑えようとしても込み上げてくる。

姉の身代わりなのだ。

（貴輝先輩はお姉ちゃんのこと、忘れてないのかもしれない）

些細な言葉から貴輝が藤花を気に掛けていたのではないかと思っ
てしまったのだ。

姉の好みを覚えていた貴輝。

（でも先輩はお姉ちゃんと全然違うつて分かってて私を選んでくれ
たんだよね……？）

貴輝の真意が知りたい。

紫音は不安な心を隠すように、貴輝の手をそつと握り返すのだっ
た。

その日、貴輝は紫音を家まで送り届けた。

「貴輝先輩、今日はありがとう」

玄関先で別れ際にお礼を言う紫音。

「また遊びに行こうな」

「うん」

一抹の不安を抱えながらも、貴輝の優しい言葉に、紫音は二人だ
けの時間を惜しんでいた。

この先もずっと貴輝の彼女でいたい。

思ったびに貴輝の隣にいない自分を想像してしまう。

そして胸に生まれる重い苦しみ。

でも離れられない。離れたくない。

紫音は貴輝を繋ぎとめるとえホンの小さなものでもあれば、それにすがりつきたい思いだった。

その時、不意に玄関のドアが開いた。

「あら、紫音帰ってきてたの？」

顔を出したのは姉の藤花。

帰ってきた紫音とは逆に、これから出掛けるところだった。

「え……貴輝、くん。久し……ぶりね」

藤花はすぐ貴輝がいることに気づき、言葉を掛けた。

しかし紫音は姉の様子がいつもと違うことに気がついてしまった。

（あのお姉ちゃんが……動揺してる）

平静を装っているが、紫音は目にしてしまったのだ。

貴輝を見た瞬間、姉の表情が驚きに固まり、その後熱を含んだ憂いの瞳を浮かべたのを。

「藤花先輩も元気そうだね」

貴輝の返事をした声を聞いて、紫音は自分の不安が当たっていることを知ってしまった。

自分や他の人達と話す時とは少し違う、心持ち緊張したような心を抑えたような声。

それは貴輝が他の人とは違う感情を藤花に抱いているからだと感じ、紫音は胸が潰れる思いがした。

紫音は恐る恐る二人の顔を見比べる。

言葉はなくとも、互いの想いが交錯していた。

二人だけの空間。

それを侵すことは誰にも許されない気がした。

テニス部の誰もが知っていた二人の隠していた想い。

それを今日の前で見せつけられた紫音は、信じていた信じようとしていた貴輝の言葉すら粉々に砕け散ってしまったのを感じた。

（あのお姉ちゃんに彼氏がないのも、本当は貴輝先輩が忘れられなかったからなんだ）

そして貴輝はやっぱり自分に姉を重ねて見ていたのだと痛感した。

（私は……邪魔者）

紫音は自分が貴輝の隣にいてはいけないことを悟った。

自分の想いを優先して貴輝を苦しめてはいけない。

（先輩は私の想いを知ってるから、きっと自分から別れを切り出したりしない）

藤花ではなく、自分と付き合いたいと言った貴輝だからこそ、その言葉通りこの先も自分を大切にしてくれるだろう。

でもそれは愛ではない。

愛情に過ぎないのだ。

紫音は自分の居場所が貴輝の隣にないことを、胸の痛みを抱えながら受け入れるのだった。

*

*

*

あれから二日が過ぎようとしている。

あの貴輝との別れを決めた日、夜遅く帰ってきた藤花を紫音は待っていた。

藤花の想いを確かめたかったのだ。

紫音を見た藤花は聞いてきた。

「貴輝ちゃんと付き合ってるの？」

紫音は肯定も否定もせず、藤花に聞き返す。

「お姉ちゃんはお貴輝先輩のこと好きなんでしょう？」

「紫……音」

紫音に心を見透かされた藤花は真顔で紫音を見つめた。

「お姉ちゃん熱い瞳で貴輝先輩を見てた。今でもそんなに好きならどうして告白しないの？ お姉ちゃんの想いなら絶対届くの……。貴輝先輩もお姉ちゃんと同じ瞳でお姉ちゃんを見てたよ」

二人が両思いなのは事実なのになぜ想いを口にすることがなかったのか。

紫音はそれが知りたかった。

「……十代の歳の差って大きいのよ」

藤花は苦笑した。

女の方が二つも年上だということを藤花は気にしていたのだ。

自分のプライドの高さが全くなかったと言えば嘘になる。しかし藤花はそれよりも貴輝の面目を気にしていた。あの完璧な貴輝の傍に自分のような年上の女がいては彼の評価を下げてしまう。

紫音は藤花の本音を聞いて、姉が本当に貴輝のことを想っていることを知り、身を引くことが間違いではないことを確信した。

「お姉ちゃん、貴輝先輩は完璧でいたいなんて思っていないよ。一人の女性を愛し抜ける人だよ」

紫音はそれだけ言うと自分の部屋へ戻って行った。

次の日紫音は貴輝に告げようと思ったが、なかなか言い出せず今日を迎えていた。

今日こそ言わなくては。延ばせばその分自分も苦しくなっていくのだから。

紫音は言い聞かせるように何度も心の中で呟いた。

紫音は貴輝の居残り練習が終わるのを待っていた。

貴輝は先に帰っててと言ったが、紫音は言い出す機会が今しかないと思い部室の前で待っていた。

「紫音、待っててくれたのか？」

ラケットを片手にタオルで汗を拭きながら貴輝が現れた。

紫音は壁にもたれていた体を起こし、貴輝と正対する。

「貴輝先輩、……話があるの」

紫音は震えそうになる声を抑えながら貴輝を真っ直ぐに見つめた。

俯いたりしたら貴輝に罪悪感を与えてしまう。

紫音は浮かびそうになる涙すら必死に堪えた。

「……紫音？」

いつもと違う彼女の様子に、貴輝は紫音の心を探るように見つめ返す。

紫音の身に何かあったのだろうかと思っただ。

紫音の心の中に藤花と貴輝が再会したシーンが浮かんだ。

（私にはもう二人の邪魔はできない）

意を決して紫音は重い口を開く。

「貴輝先輩の心の中に今でも住んでいるのはお姉ちゃん、でしょう？」

紫音の言葉に貴輝は瞳を大きくした。

今の貴輝にはそれを否定できなかった。

紫音の家で藤花に再会して以来、貴輝の心は複雑に揺れていた。

紫音の穏かな心に惹かれたから彼女に告白した。

しかし藤花に再会した時、自分の心に湧き上がる熱を感じたのも本当のことだった。

まるで以前の同じ時を過ごしていた時代に戻った気がした。

貴輝は自分の心が分からなくなってしまうていた。

「先輩は私にお姉ちゃんを重ねていたのよ。……私にはそれが分かったの。だからもう先輩の傍にはいられない」

「紫音!？」

貴輝は思わずタオルを捨てて紫音の腕を掴んだ。

紫音はその貴輝の手に反対の手で触れる。

「先輩違つよ。先輩が掴む腕はお姉ちゃんのだよ。お姉ちゃん年上つてこと気にして貴輝先輩に想いを伝えられなかったんだって。……お姉ちゃんも今でも忘れられないでいるの。貴輝先輩のこと待ってるよ」

貴輝の手がそつと離れた。

貴輝は自分の心を言い当てられ返す言葉がなかった。

紫音の言う通り、自分は確かに藤花を忘れていなかったのだから。

藤花が年上つてことを気にして告白しなかったと言つなら、それは自分にも同じことが言えた。

大勢の人から慕われている藤花を、年下の自分が支えていけるだろつかと確固たる自信がなかった。だから想いを伝えられなかったのだ。

「先輩と付き合えたこと、私後悔してないから。先輩も自分を責めたりしないでね。お姉ちゃんのことよろしくね。……今までありがとう」

紫音は貴輝を残し、その場を去ろうとした。

「紫音っ！」

貴輝は後ろ姿の紫音を呼び止めた。紫音は立ち止まる。

貴輝の心は決まっていた。紫音の想いが彼に決心をさせた。

「ごめんな」

その一言に貴輝の紫音に対する思いがすべてこもっているのを紫音は受け止めていた。

紫音は振り返った。

「貴輝先輩が幸せなら、私も幸せだから」

紫音の笑顔で言った一言に貴輝は救われたのだった。

* * *

部室から離れた瞬間、紫音は堰を切ったように泣き出した。

後から後から溢れ出る涙は止まらない。

泣いているのを誰にも見られなくて、紫音は第二校舎の裏手

に走った。

紫音は壁に隠れるようにしてうずくまった。

静けさの中に紫音のすすり泣く声だけが響いていた。

（貴輝……先輩）

思い浮かぶのは貴輝の優しい笑顔。何気ない仕草。

いつも見つめていた。

付き合えて夢のようだった。幸せだった。

自分の行動に後悔はしていない。

しかし一度味わった幸せを失うことの辛さは、想像以上に紫音に襲いかかった。

貴輝の幸せを願う心に嘘はない。

けれどこのことで紫音の姉に対するコンプレックスは増した。

何をやっても姉には叶わない。自分には自信のあることなんて全くない。

（今までも、……そしてこれからも）

紫音は自分の存在意義が分からなくなってしまった。

「紫……音ちゃん？」

開いていた窓からすすり泣く声に反応した将斗が顔を出し、紫音の泣き崩れている様に絶句した。

将斗は今日委員会で部活を欠席していた。委員会の仕事が長引いて帰るのが遅くなったのだ。

突然上から降ってきた将斗の声に、紫音は思わず将斗を見上げる。

「将……斗……先輩？」

こんな姿を見られて、紫音は逃げ出そうとした。

「紫音ちゃん！」

尋常でない紫音を将斗は窓枠を飛び越えて引き止める。

「どうしたの？ ……まさか貴輝のことで女子からいじめられたのか？」

将斗は知っていた。これまでも何度か紫音が陰口を叩かれていたのを。

相手があの貴輝なら、女子の妬みや僻みを紫音が受けるだろうことは予想できることだった。

だが紫音の反応は違った。

「……貴輝先輩と別れ……ちゃった」

「別れた!？」

意外な答えが返ってきて、将斗は信じられない瞳で紫音を見下ろした。

「どうして？ 紫音ちゃん、あんなに嬉しそうだったのに。……貴輝が別れようと言ったのか？」

紫音から言い出すなんて考えられなかった。彼女が誰を想っているか、将斗には一目瞭然だった。

だがあの貴輝が本気でない相手に告白するはずがない。ましてこんな早く別れるなんて有り得ないと思った。

「私から……言ったの」

俯いて言った紫音の言葉を聞いて将斗はますます分からなくなっ
た。

「どうしてそんなこと言ったの!？」

将斗は紫音の両方の二の腕を掴んだ。

紫音は急に腕を掴まれ、反射的に将斗を見上げた。

将斗の今まで見せたことのない真剣な瞳に、紫音は彼にすがりた
い思いにかられた。

「分かつちゃったの。貴輝先輩とお姉ちゃんが相思相愛だって。貴輝先輩は私の中にお姉ちゃんを見てたの。……だから私も一緒に

いらなかった」

「……………紫音ちゃん」

将斗は涙を流し続ける紫音の思いを知り、胸が痛かった。

紫音が貴輝のことをどんなに好きだったか、将斗も分かっているつもりだ。

別れなんて言い出さなければ貴輝の傍にいられたはず。それなのに自分の想いを押し殺してまでも、貴輝の想いを尊重したのだ。

こんな風に涙をいっぱい流した瞳で自分を見る紫音を、将斗はもう放つてはおけなかった。自分の心を隠してはおけなかった。

将斗は紫音を強く抱き締めた。

「将…斗……先輩」

紫音は一瞬何が起こったのか分からなかった。

将斗の腕の強さと彼の胸の温もりで、ようやく自分が今どうなっているのかを知った。

「紫音ちゃん、俺は君が好きだ」

将斗はずつと言わないでおこうと思っていた言葉を紫音に告げた。

貴輝と上手くいっているなら言うまいと思っていた。言っただけの関係壊したくはなかった。

しかし今紫音の深く傷ついた様を見て、自分が彼女を助けたいと思った。

「俺には藤花先輩の面影なんて関係ない。紫音ちゃん自身だけを見ていた」

耳元で告げられる将斗の熱い言葉に、紫音は涙を流していたことを忘れるほど動揺した。

将斗が自分をそんな風に見ていたとは夢にも思っていなかった。

（将斗先輩が私を……？ どうして？）

「俺なら君の心を分かってやれる。……前に言っただろ？ 紫音ちゃんの藤花先輩に対するものと俺の貴輝に対するものが似てるって。俺なら君にそんな思い絶対させない！」

紫音が貴輝を見つめていたように、将斗は紫音を見つめていた。

自分と境遇の似ている紫音のことが気になって仕方がなかった。皆の前では明るく振る舞っている紫音のふと時折見せる苦しみを、彼女を見つめていた将斗だけが気づいていた。

そんな紫音の健気さが、いつしか将斗の心に愛しさを芽生えさせていったのだった。

「君が貴輝のことをまだ好きなのは分かってる。君の心を少しでも和らげてあげられるならそれだけでいい。……紫音ちゃん、俺と付き合って欲しい」

将斗の言葉に紫音は揺れた。

将斗なら今のこの苦しみから救ってくれるかもしれない。

将斗には恋心はなかったが、今日までの日々で将斗への信頼は大きかった。

（頼ってしまいたい）

紫音はすがりつきたい、そんな思いを必死で断ち切る。

「……ごめんなさい」

紫音は将斗の胸から体を起こした。

「俺じゃ駄目なのか？」

紫音は首を横に振る。

「将斗先輩の気持ち、嬉しかった。頼ってしまいたかった。……でもそれじゃあ貴輝先輩と同じことを、今度は私が将斗先輩にしてしまうことになるもの」

貴輝が自分に藤花の面影を求めたように、将斗に貴輝の姿を追い求めてしまう。

紫音にはそれが分かっていた。

今のこの自分と同じ思いを、将斗にさせるわけにはいかない。自分と似ていると言っていた彼にだけは絶対させてはいけない。

「俺はそれでもいい」

「だめだよ」

将斗の気持ちを紫音は頑なに拒む。

将斗の想いを受け入れられるのは、本当に彼を好きになった時だけ。

将斗が大切な先輩だからこそ今はできなかった。

「紫音ちゃんの気持ちはよく分かったよ。だけど頼りなくなつた時はいつでも助けるから言つてこいよ。……ただ俺はもう君への想いを抑えたりしないから。俺は君を振り向かせるよ。貴輝のこと、忘れさせてみせるから……」

将斗の言葉に紫音は少し俯く。

「……忘れなくちゃいけないのかな。……いけないんだよね」

紫音は自分に言い聞かせるように呟いた。

今も心の大半を占める貴輝の存在。

大好きだった優しい笑顔、テニスをする姿。

（いつかは一つ残らず心の中から消さなくちゃいけないんだよね）

淋しそうにする紫音を将斗はそっと抱き寄せた。

将斗の包み込むような優しさに、紫音は再びそつと涙を零した。

【1】前編（後書き）

初めての投稿です。

ご感想頂けましたら幸いです。
よろしく願います。

【後編】

夏休みに入った。

貴輝と藤花はあの後程なくして付き合い始めていた。

紫音と将斗は友達以上恋人未満の関係を保っている。

貴輝と別れてから、紫音は将斗と一緒にいることが多くなった。

将斗は紫音を気遣うように、貴輝のことを思い出させないように、彼女の傍で彼女を守っていた。

休日には遊びに連れ出してくれた。

それは決して強引なものではない。

紫音は傍らに感じる将斗の温かな空気に心救われていた。

（将斗先輩のこと好きになりたい。彼の想いに応えてあげたい）

貴輝以外の誰かを好きになれる時が来たとしたら、それは将斗以外考えられないくらい、紫音は将斗を頼りにしていた。

将斗は女子の妬みからも紫音を守っていた。

貴輝と別れたことは付き合いだした時よりも早く学校に広がった。

だが紫音の傍には今度は頭中将と呼ばれる学園第二位の人気を持つ将斗がいたのだ。

女子は紫音のことを取り入るのが上手い子などと中傷した。

学園の一、二位を争う男子を独占されたようで、女子には面白くなかったのだ。

特にテニス部内で紫音は肩身の狭い思いをしていた。

それを知った将斗はある時女子の部屋へ強引に入って言った。

貴輝が今藤花と付き合っていること。まだ紫音が自分の想いを受け入れてないが、諦める気はないこと。どうして紫音を好きになったのか。

あの藤花と比べられ続けた紫音の心を分かってやってくれと。自分が好きで紫音の隣にいるのだから、何か言いたいことがあったら紫音ではなく自分に言ってこいと。

普段の和やかにしている将斗と怒りを抑えた眼差しの将斗のそのギャップに、女子は大人に叱られた子供のようにシュンとなった。

それからというもの、女子の陰口はずいぶん減った。

一方貴輝と藤花との関係は何事もなく順調にいつていた。

休みの日には時々二人でどこか出掛けたり、夜も電話で話しているのを紫音も耳にしていた。

紫音と藤花の部屋は隣同士。

夜の静けさが壁一つ隔てた二人の会話を微かに伝えていた。

紫音は初め、そんな様子に二人の仲が上手くいっているのを知り、貴輝が幸せならそれでいいと思おうとしていた。

だが最近は二人の様子を見たくも聞きたくもないと思うようになっていた。

夜の電話での二人の会話が聞こえると、紫音は耳を塞いで聞かないようにしていた。

藤花への妬みが紫音を悩ませていたのだ。

——どうしていつも姉ばかり。

貴輝の幸せを願っているのに、そう思うたびに紫音は自分の心が汚れていくのを感じていた。

こんな心捨ててしまいたい。

紫音は惨めな思いを噛み締めていた。

そんなある日の夜。

紫音はベランダに出て夜空を眺めていた。

星の輝きが自分の醜い心を清めてくれる気がした。

紫音は人の話し声に下を見下ろす。

家の前に貴輝と藤花が立っていた。デート帰りに藤花を家まで送ってきたところらしい。

紫音は二人を見たたん、その場に凍りついてしまった。

ベランダの手摺りを握る手に思わず力が入る。

「藤花先輩、じゃあまた今度」

貴輝がそう言って帰ろうとした時、藤花が動いた。

まるで貴輝に吸い寄せられるように、藤花が貴輝へ口付けしたのだ。

貴輝は初め驚いたが、藤花の想いに応えるように彼女の背に手を回した。

紫音はそれ以上見ていられなかった。

ベランダの壁に隠れるように、その場に座り込んでしまった。

紫音の心はまるで驚掴みされたかのように息が詰まるくらい苦しかった。

（お姉ちゃん、……貴輝先輩）

紫音は手を胸の前で握り合わせ体中をガクガク震えさせていた。

二人は付き合っているのだからキスするのは当たり前のこと。

だがどうして自分の見ている前でそれが起こってしまったのか。

どうして自分が見なければならなかったのか。

目に焼き付いて離れないそのシーンに、紫音は自分の心が壊れるのではないかと思った。

貴輝と別れた時、紫音はまだ貴輝への想いを忘れたくないと思った。

片思いでもいい。そつと遠くから見ただけなら許される気がしていた。

貴輝を好きになったこの気持ちだけは思い出として残しておきたいと思った。

しかし、今紫音ははつきり思っただ。

——貴輝を忘れたい。

彼への想いも好きになった自分のことも、すべて何もなかったことにしてしまいたい。

今のこの苦しみから解放されるのであれば、何と引き換えにしても構わなかった。

紫音は部屋に入ると救いを求め携帯電話を手を取った。

アドレスから一つのナンバーを表示し発信する。

紫音は祈るような気持ちでコールを三回聞いた。

『もしもし、紫音ちゃん?』

「……………将斗先輩」

将斗の声に紫音は縋るような声で彼の名を呼んだ。

今にも泣き出しそうな紫音の声に、将斗の声が返ってくる。

『紫音ちゃんどうしたの? 何かあったの?』

紫音は携帯電話を握り締める。

「将斗先輩、助けて。……………私もう耐えられない」

紫音の様子に、将斗は電話ではらちがあかないと思った。

『今、家?』

「う……………ん」

『今からそっち行くから会って話そう。近くに行ったら携帯に連絡するから出てきて。いいね?』

「うん、待ってる。早く……………来てね」

『ああ、待ってるよ。すぐ行くから』

紫音の心細い頼りなさそうな声に将斗は力強く答えた。

紫音はそれから携帯を握り締め、ただひたすら将斗からの電話を待っていた。

将斗なら自分を助けてくれる。

その思いが今の紫音を支えていた。

やがて紫音の携帯が鳴り出す。

紫音はすぐさま携帯に出た。

『紫音ちゃん？ あと二、三分で着くから出てきて』

「うん、すぐ行く」

紫音は携帯を持ったまま部屋を出て階段を降りた。

「あら、こんな時間にどこ行くの？」

玄関へ向かう紫音に母親が聞いてきた。

時間は夜の九時をすでに回っている。紫音が夜から出掛けるなんて滅多にないからだ。

「うん。ちょっと学校の先輩と会ってくるだけだから……」

紫音は顔も会わず俯いて言うと、急いで玄関を出た。

家の門の前で待つこと一分弱、将斗が走って現れた。

将斗と紫音の家は通常電車と徒歩で四十分くらい離れている。

それが三十分切って紫音の家まで来ることができた。徒歩の部分を持てる力一杯使って走ってきたからだ。

それだけ将斗は紫音のことを案じていた。

そしてそこまでして駆けつけて来てくれた将斗の気持ちを、紫音は嬉しく感じた。

「紫音ちゃんお待たせ。何があったのか話して。俺、君の力になりたいから」

息を切らしながら己のことより紫音を心配する将斗。

紫音はすぐにでも打ち明けたかったが、家にいる藤花を気にしてしまう。いや藤花だけではない。近所の誰が聞いているかもしれないこの場所で話すのを躊躇う。

「将斗先輩にだけ話したいの。他の誰にも聞かれたくないの。二人だけになれる所へ連れて行って」

自分の心の醜さを、将斗にだから曝け出せると思った。

将斗以外の誰にも知られたくない。

「分かったよ。……駅前のカラオケ屋でいい？」

将斗は少し考え答えた。

とりあえず個室だから他の邪魔は入らない。多少の雑音は仕方ないと思った。

公園なども考えたが、夜の公園は意外と物騒だからやめにしたのだ。

ともかく、場所のことより紫音のことの方が大事だった。

将斗は思い詰めたように自分を見る紫音の瞳を見て、その訳を早く知りたかった。

夜に助けを求めてくるくらい追い詰められることが紫音に起こった。よっぽどのがあったのだと将斗は思う。

紫音は将斗の提案にただ頷いた。

二人は無言で移動した。

その間、将斗はまるで紫音を包み込むように肩を抱いて労わっていたのだった。

カラオケ店の個室に入ると、紫音は張り詰めた糸が切れたのか、涙を零しだした。

将斗は紫音をソファに座らせると自分も隣に腰を下ろした。

「もう我慢しなくても大丈夫だよ」

将斗の優しい言葉に、紫音は心に抱えていた苦しみを口に出す。

「将斗先輩、貴輝先輩を忘れさせて。私の心から消し去ってしまつて！」

「……何があつたの？」

将斗は紫音の心境の変化を知る。

告白した時はまだ貴輝のことを忘れなくなさそうにしていた紫音が、今はつきり忘れたいと口にしたのだ。

忘れたいほどのことが紫音の身に起こつたのだと将斗は悟つた。

「今日貴輝先輩とお姉ちゃんキスしてるところを見ちゃつたの。そのことが頭から離れないの。……本当は毎日辛かった。二人が一緒のところを見るのも、電話で話しているのが聞こえてくるのも。いつも壁一つ隔てた向こうで二人の存在を感じていたの。……もう嫌、疲れちゃつた。貴輝先輩への想いで苦しむのもお姉ちゃんに嫉妬するのも、こんな醜い心を持った自分を惨めに思うのも！」

将斗は紫音の心を知り、彼女を抱き寄せた。

自分が考えていた以上に紫音が傷ついているのを感じ、守つてやりたかつたのだ。

紫音は将斗の温もりに、自分の過去と決別する決心をした。

「私、将斗先輩を好きになりたい。貴輝先輩の代わりとかじゃなくて、将斗先輩自身を好きになりたい」

紫音は将斗の瞳を真っ直ぐ見て言った。

将斗は紫音の一途な想いに胸を熱くさせる。

告白した時、紫音は貴輝の面影を追ってしまつからと将斗の想いを拒んだ。

その紫音が将斗の想いを受け入れたのだ。

決して貴輝の身代わりにはしない。将斗自身を愛したい。

将斗は紫音の並々ならぬ決意を感じていた。

「俺と付き合ってくれるんだね？」

「はい」

紫音は迷いもなく即答した。

「……必ず貴輝のこと忘れさせてあげる」

紫音の想いに答えるように、将斗は決意を秘めた想いを口にした。

将斗は紫音の頬に触れじつと彼女を見つめる。

紫音はそつと瞳を閉じた。

将斗の唇が優しく紫音の唇を覆った。

まだ誰も、貴輝ですら触れたことのなかった紫音の唇。

愛する人とのキスを夢見ていた紫音にとって、それは悲しい現実であった。

(……もう戻れない。もう……戻らない)

紫音は決別の思いに一筋の涙を零した。

* * *

秋、長雨の時期を過ぎた頃。

紫音は将斗を頼りに毎日を送っていた。

貴輝を忘れる決心をした時、紫音はテニス部を辞めようと思っていた。貴輝との接点をなくそうとしたのだ。

だが将斗がそれを止めた。テニスが嫌になって辞めるなら仕方ないけど、そうでないなら続けていればきっと自分のためになるからと

だから紫音は今でもテニス部に在籍している。

ただ貴輝の方をなるべく見ないようにしていた。将斗もそれがかつているから、休憩中は紫音の傍に来て貴輝が紫音の視界に入らないように努めている。

紫音と将斗が二人一緒にいる光景は、もはやテニス部では見慣れ

たものとなっていた。

そんな光景を浮かない想いを胸に秘めながら眺めている生徒が一人いた。

——貴輝だ。

将斗一人を頼りにする紫音の姿を見ているうちに、貴輝は自分の想いが分からなくなっていた。

将斗から紫音と正式に付き合うことになったと告げられた時、紫音を傷つけた自分には何も言う権利はないと思っただし、将斗なら紫音を大切にすることも分かっていたから、反対する理由は何もなかった。

自分と付き合っていた時の紫音はどこか遠慮がちにしていたが、将斗という紫音は無防備に将斗を慕っている。

紫音には自分より将斗の方が相応しかったのだ。

貴輝はそう思うと同時に胸が締めつけられた。

なぜ今さらこんな気持ちになるのか、貴輝には分からなかった。

紫音が言ったように、彼女に藤花の面影を見ていたのは否定できないこと。ただその面影を好きになったのか紫音自身に惹かれたのか、貴輝には区別できなかった。

そして今自分は藤花本人と付き合っている。しかし貴輝は今度は藤花の中にある紫音の面影を捜している自分がいることに気づいて

いた。

——自分が本当に愛しているのは誰なのか。

貴輝は自分の心が見えてこないことで苦々しい思いを抱えていた。

そんなある日。

貴輝は藤花から映画に誘われ出掛けた。

切符を買ってロビーに入る。ちょうど前の回が終わり続々と人が出てきていた。

貴輝はある一点を見た瞬間、目を丸くする。

出てくる人の中に将斗と紫音の二人の姿を見つけたのだ。

二人も貴輝と藤花を見つけ一瞬立ち止まったが、将斗が紫音の肩を抱いて何事もなかったかのように館内から出て行った。

「今の紫音と将斗くんだったよね？ 気づかなかったのかな？」

藤花は不思議そうに言った。

「どうかな……」

貴輝は誤魔化す。

（いや気づいていた。だから将斗は俺から紫音を隠したんだ）

将斗が自分から紫音を離そうとしているのは分かっていた。

いつもそう。

紫音の隣にいていいのは将斗だけ。

だがこの瞬間、貴輝にははっきり分かったことがあった。

それは将斗に嫉妬している自分の心だ。

藤花が隣にいるというのに、貴輝の心は紫音に向いていた。

今自分の心が誰にあるのか、貴輝は悟ったのだ。

藤花の面影ではなく、紫音自身を想っていると。

どうしてもっと早く気づけなかったのか。

もう遅いのだろうか。

二人の去って行った方を見つめる貴輝を見上げ、隣にいる藤花が決心したように口を開く。

「貴輝くん、今日誘ったのは本当は大事な話があるからなの」

貴輝は藤花の言おうとしていることが分からず、ただ彼女を見つめるのだった。

*

*

*

「お父さんお母さん、ちょっと話があるの」

夕食を食べ終えくつろいでいるところで、藤花が改まったように言った。

「……話？」

父親がテレビを見ていた視線を藤花へと移した。

母親も食後のフルーツを食べている手を止める。

「なーに？ 改まっちゃって」

「うん、大事な話なの」

紫音も自分の部屋に行こうとしていたのを止めて、その場に留まった。

（大事な話って何？）

これから家族会議でも始まるような雰囲気漂っている。

藤花のもたらしたこの空気に、紫音は無言でこれから起こることを見届けようとしていた。

「あのね、私来年から大学を一年休学してイギリスに留学しようと思ってるの」

藤花の意外な一言に、両親も紫音もすぐに言葉が出なかった。

「費用はバイトして少しはあるけど、お父さんたちに負担かけてしまふことだから私の一存では決められないの。もしかしたら一年以上になるかもしれない。でも私、将来通訳関係の仕事に就きたいから、だから許して欲しいの」

藤花は両親に頭を下げた。

両親は顔を見合わせる。

何の手も掛からない、何でも自分で率先してやってきた藤花が頭を下げてまで自分達に頼んできている。

「……費用の足りない分は出来る限り私達で出すから、自分の思う通りにやってみなさい。ただし途中で投げ出して帰って来ることのないように。あと週に一度は電話でもメールでもいいから連絡すること」

「じゃあ……いいの？」

「頑張りなさい」

藤花の顔が喜びにほころぶ。

両親もこの選択が間違っていないことに自信を持っていた。

子供が遠くの外国へ行くのが心配でないはずはない。しかし子供はいつかは巣立っていくもの。それを止めることは子供の自由を奪うことになってしまう。

両親は快く見送ってやろうと思った。

「ありがとう、お父さんお母さん！」

それから両親と藤花は留学の話で一通りの盛り上がりを見せた。

ただ一人紫音だけが話についていけてなかった。

（お姉ちゃんがイギリスに留学。それも最低一年も……）

いつも一緒にいた姉がこの家からいなくなる。その淋しさの実感はまだない。

紫音の心を沈ませたのは貴輝のことだ。

一年間も離れ離れになるなんて、貴輝は今どんな思いをしているのだろうか。藤花を一年間待ってられるのだろうか。

（お姉ちゃん、どうして貴輝先輩と離れてまで留学しようと思ったの！？）

将来の夢を叶えるため。それは分かっている。

だがどうしてこの時期に行くのを決めたのか。

藤花が自分の部屋へ戻ろうと席を立った後を紫音は追う。

「お姉ちゃん！」

「何、紫音？」

藤花がまだ嬉しそうな表情を浮かべたまま紫音に振り返った。

紫音は貴輝のことを思うとやり切れない思いがした。

「貴輝先輩には留学のこと話したの？ 先輩、待っててくれるって言ったんだよね？」

紫音の思い詰めたような瞳に、藤花は真顔になる。

藤花はこの時はつきり確信した。紫音の心に誰が住んでいるのかを。

そうではないかと思ってはいたが、今の今まで確信できずにいたのだ。

「貴輝くんとは……別れたの」

藤花の一言に紫音は藤花を凝視した。

「……先輩に待てないって言われたの？」

言いながらもそんなはずはないと否定する。

あの貴輝がそんなこと言うはずはないと。

「私も貴輝くんももう半年前とは違う方向を向いてしまってた。だから終わりにしたの。……紫音、もう私に遠慮しなくてもいいんだからね」

藤花は納得のいつていない紫音に苦笑し、自分の部屋へ入って行った。

残された紫音は茫然とたたずんでいた。

あの貴輝が藤花以外に目を向けるなんて考えられなかった。

藤花にもそれは同じこと。

紫音は姉の言葉を思い出し、ハツとする。

（お姉ちゃん、私の気持ちに気づいてた？ だから私に遠慮して別れたんじゃ……）

忘れたくてもいまだ忘れられずにいる貴輝への想いを見抜かれた。だから身を引いたのではと思った。

（あの二人を別れさせちゃダメッ）

紫音はどうすればいいのか、考えあぐねるのだった。

*

*

*

次の日の部活終了後。

紫音は将斗に先に帰ってもらい、一人居残り練習をしていた貴輝があがるのを、コートの横にある体育館の前で待っていた。

やがて練習を終えた貴輝が、部室へ行くため体育館の前を通った。

紫音は貴輝の前に歩み出る。

貴輝は紫音がそこにいることに驚いた。

「貴輝先輩、お姉ちゃんどうして別れたの？ お姉ちゃんが留学するからなの？ ねえどうして!？」

紫音の思い詰めた顔に、貴輝は一瞬躊躇した。

一度は紫音を傷つけ別れた自分が、彼女に自分の本音を言う資格があるのだろうかと思ったからだ。

だが変な言い訳をしても紫音は納得しないと思った。そして自分の心を何の偽りもない今こそ伝えたいと痛切に思った。

「藤花先輩も俺も、今は別の物に目を向けているのが分かったから別れたんだ。藤花先輩は将来の夢を、俺は藤花先輩でない女の子のことが今一番大切だって」

「……お姉ちゃんでない女の子？」

貴輝に藤花以外で想いを寄せる者のいることが信じられなかった。

熱い瞳で藤花を見ていた貴輝を思い出すと、藤花以外は有り得ないと思った。

疑問を投げかけるように見つめてくる紫音を、貴輝は真剣な眼差

しで見つめ返す。

「君だよ、紫音」

「……う………そ」

「嘘じゃない。やっと本当の気持ちをはっきり分かったんだ。君が好きだと。藤花先輩の面影でもなく君が好きだと。藤花先輩に再会した時、以前の気持ちを思い出して揺れた。だから君が藤花先輩と重ねて見てると言った時否定できなかった。でも藤花先輩と付き合ってた初めて分かったんだ。彼女に対する思いは以前とは違う、憧れだっただけに。藤花先輩も俺と同じ思いだったんだと思う。もうお互い、あの頃の気持ちを通過してしまってたんだよ」

紫音は必死で頭を振って否定する。

「違う！ お姉ちゃんは私の気持ちを知ってるから貴輝先輩と別れようとしてるんだと思う。貴輝先輩もお姉ちゃんと離れ離れになるのが怖いから別れようとしてるんじゃない？ ねえお姉ちゃんを止めて。止められるの、貴輝先輩だけなの！」

自分のせいかもしれない。二人が別れてしまったのは。

紫音の言葉に貴輝は目を見開く。

「……紫音の気持ちって」

紫音は我に返ったように口に手を当てた。

自分の気持ちはまだ貴輝にある。そう言ってしまったのも同然だっ

た。

「君は俺のことどう思ってるんだ！？ 聞かせてくれ！」

貴輝はラケットを下に落とし、紫音の両の二の腕を掴んだ。

貴輝に強い瞳で見つめられ、紫音は溢れ出そうになる想いをグッと堪える。

（言えるわけない、本当の気持ちなんか。……将斗先輩だけは絶対裏切りたくない）

一番辛い時、いつも傍にいてくれた将斗の想いを、紫音は何があっても裏切りたくはなかった。

紫音は俯いた。

「……私、将斗先輩が大事なの。貴輝先輩はお姉ちゃんを大事にしてあげて」

「将斗が……好きか？」

貴輝のトーンの落ちた低い声に、紫音の胸に切なさが込み上げた。

貴輝をまだこんなにも好きなことを改めて思い知る。

貴輝の想いに応えたかった。しかしそれと同時にもう二度と姉の身代わりとして見られたくないと思った。そして何よりも将斗の想いに報いたかった。

紫音はただ黙って頷いた。

「そつ……か」

貴輝は自分を納得させるように呟き、紫音の腕からそつと手を離した。

紫音はもう一度「お姉ちゃんのことよろしくお願いします」とだけ言い残し、その場を後にした。

貴輝は何も言わず、紫音の後ろ姿を見送ったのだった。

紫音はそのまま駅へ向かった。

ホームで地元へ行く電車を待つこと数分、電車がホームに入ってきた。

だが紫音はその電車には乗れず、電車は紫音を残し発車してしまった。

紫音はどうしても家に帰る気にはなれなかった。

（お姉ちゃんにどんな顔して会ったらいいの？）

二人を戻そうとした結果、貴輝に自分の想いが悟られてしまったかもしれない。しかも貴輝は藤花ではなく、自分が好きだと告げてきた。

その言葉を瞬間でも嬉しいと感じた自分が許せなかった。

藤花が自分のことを思っ て身を引いたかもしれないのに、嬉しいと思っ た心を消し去っ てしまいたかった。

しかしそれでもなお貴輝のことが好きで、忘れたくても忘れられない想いが切なくて、紫音は貴輝の残り香を探すように、それにすがるように、反対側のホームへと歩き出す。

それはたっ た一度デートで訪れた遊園地の方角だった。

遊園地へ着いた頃にはすでに辺りは薄暗くなり始めていた。

もうほとんど営業時間が終わりにかけている。

紫音は入場券を買っ とフラフラと遊園地へ入っ ていった。

紫音はあの日の自分達を捜すように辺りを見渡していた。

やがて営業時間が終わりに遊園地内は人気がなくなった。だが紫音は帰ろうとしない。

足はメリーゴーランドの方へ向かっていた。

（あの一番幸せだった瞬間に戻れたら……）

紫音はあの頃の想いを取り戻したかった。

ほんの少しの間でいい。幸せな思いに浸りたかった。

紫音はメリーゴーランドの周りを半周ほどして、中央付近にある馬車の中に腰を下ろした。

辺りは静寂の闇に包まれていた。

月明かりだけがぼんやりと地上を照らしている。

夜の暗闇が紫音の心の悲しみをさらに増長させた。

（もうどんなに願っても、あの頃には戻れないんだ）

あの日のことを思い出すことで、紫音は過去がもう二度とやっ
こないことを痛感し涙した。

そして思い知らさせる。

自分の心が貴輝の何一つ忘れていないことを。

止めようもないほど溢れ出る熱い想いが胸を焦がしていることを。

貴輝の胸にもう一度飛び込んでいけていたら、また二人でここへ
来れたのかもしれない。

しかし紫音は藤花も将斗も傷つけたくはなかった。

藤花が身を引いたのに、自分だけが貴輝の想いを受け入れること
はできなかった。

将斗のことにしても、貴輝を忘れたくて彼の何もかもを捨てる覚
悟で将斗にすぎたのに、ここで貴輝の元へ戻ったら将斗を利用し
てしまっただけになってしまう。

自分のコンプレックスを理解し、悲しい時には必ず傍で温かく守ってくれていた将斗。

紫音にはもう彼の想いに応えることしかできなかった。

(でも今だけ。この一時だけは貴輝先輩を想うことを許して欲しい)

——それで今度こそすべて忘れるから。

紫音は貴輝への想いを放出するように、ただひたすら彼のことを想い泣き続けたのだった。

*

*

*

自宅で予習していた貴輝の携帯が鳴り響いた。

「はい、藤花先輩？」

『貴輝くん、将斗くんの携帯知らない？』

切羽詰まった藤花の声。

「知ってるけど、どうかしたのか？」

貴輝は一抹の不安を覚えた。

『紫音、将斗くんと付き合ってるでしょ？ 将斗くんの自宅に電話しても留守電だったのよ。……実は紫音がまだ学校から帰って来て

ないの。いつも夕食までに戻らない時は必ず連絡くれる子だから、何の連絡もなしになって変だと思って……。携帯の電源も入ってないみたいな。何かに巻き込まれたりしてなければいいのだけれど……。貴輝くんは何も聞いてない?」

貴輝は藤花の話を聞いて、携帯を握り締めた。

(紫音が家に……。帰って……。ない)

時間は夜の七時半を回っていた。

自分のせいかもしれないと思った。気持ちを打ち明けたことが、彼女を追い詰めてしまったのかもしれないと。

「俺から将斗に電話するよ。折り返しすぐ電話するから待ってて」

貴輝はすぐさま将斗の携帯へ発信する。

「将斗か? 今紫音と一緒にか!」

『いや。今日は学校で別れたつきりだけど。……。何かあったのか?』

慌てた様子の貴輝の声に将斗は嫌な予感がした。

「紫音がまだ帰ってないらしい。連絡もないからって藤花先輩が心配してお前の連絡先聞いてきたんだ。俺これから心当たり捜すから、お前も見つけたら紫音の家に連絡いれて欲しい」

『分かった!』

貴輝はすぐ藤花に電話し、将斗と捜すから待っていて欲しい旨を

伝える。

そして携帯と財布だけを持って家を飛び出した。

向かった先は学校。

あの後紫音の身に何があったのか。家に帰っていないのは自分の意思なのか、何かに巻き込まれたからなのか。

貴輝は学校の最寄の駅で駅員に尋ねる。

「今日の夕方遅く、この子を見ませんでしたか？」

貴輝は付き合っていた頃携帯のカメラで撮った写真を見せた。

「……あーこの子は気分悪そうに俯いてたから声掛けようとしたんだけど、待ってた電車に乗らずに反対のホームへ行っちゃったんだよね」

貴輝はホームを振り返った。

（反対方面って……まさか！）

もし反対方面の電車に乗ったのだとしたら、行き先は一つしか考えられなかった。

貴輝は来た電車に駆け込んだ。

*

*

*

「……………紫音」

貴輝の直感した通り、紫音はメリーゴーランドの中にいた。

馬車の中で泣き疲れ眠ってしまっていたのだ。

貴輝は紫音の傍から少し離れ、藤花に連絡を取った。

紫音は見つけた。一緒に帰るから心配はいらないと。

そして将斗の携帯にも電話する。

「将斗か？ 紫音、見つかったよ。俺が家まで送ってくから……………」

将斗の安堵の溜息が聞こえてきた。

『よかった。……………紫音ちゃん、どこにいたんだ？』

「……………遊園地だ」

『遊園地？ 何で？』

将斗には思いもよらない場所だった。そしてどうして貴輝には紫音がそこにいると分かったのか知りたかった。

「俺と紫音がたった一度のデートで来た所なんだ」

『……………そう……………なんだ』

将斗には貴輝の言葉がショックだった。

今もなお紫音の心の中にいるのは貴輝なのだと痛感したのだ。

「多分俺のせいでこんなことになったんだ。詳しくは明日にでも話すから」

「……………ああ」

将斗は自分が学校から帰った後、あの二人に何かあったんだと思
いそれを知りたいと思ったが、話すと長くなりそうだから我慢した。

貴輝は電話を切ると再び紫音に近づいた。そして紫音の隣に腰掛
け起こそうか迷う。

その時紫音が苦悩の表情を浮かべたかと思うと、その瞳から涙が
一筋零れ落ちたのだった。

泣きながら眠っている紫音を目の当たりにした貴輝の胸に痛みが
駆け抜けた。

「……………紫音、……………紫音！」

貴輝は夢の中でなお苦しみに耐えようとしている紫音を、その夢
から救い出そうと名前を呼んだ。

貴輝の声に紫音はぼんやりとした瞳を開ける。

目の前にある顔が夢の中なのか現実なのか、すぐには判断できな

かった。

だが自分が今どんな状況にいるのかを悟った瞬間、紫音は貴輝から逃げ出そうとした。

「紫音っ！」

貴輝が紫音の行く手を腕を伸ばし遮る。

「行かせない。ちゃんと家に帰ろう」

紫音は夢中で頭を横に振った。

「皆心配してる。……帰るんだ」

「帰れない。……お姉ちゃんにどんな顔して会ったらいいのかわからない」

「まだ俺と藤花先輩のこと気にしてるのか？ だったら何度でも言うよ。俺と藤花先輩はもうお互いに恋愛感情はない。憧れなんだ。俺が好きなのは君だけだ。君の傍が一番安心できるんだ。俺にとって君以上大切な人はいない」

貴輝の熱い告白に、紫音の心が揺れる。

「君は将斗が好きだと言った。なのになぜここにいる！？ 君の本当の気持ちをはっきり聞かせてくれ。でなければ俺は自惚れてしまう。俺のことなんか嫌いだと、迷惑だと言ってくれ！」

貴輝の悲しそうな思いに、紫音は彼から目を逸らすように俯き、

ただ無言で涙を流すことしかできなかった

嘘でも貴輝が嫌いだったとは、迷惑だとは言えなかった。

しかし紫音の心に将斗との日々が思い出される。

(……将斗先輩だけは裏切りたくない)

貴輝が紫音の両頬を包み込んで自分の方を向くように上を向かせた。

紫音は嫌がおうでも貴輝を見つめてしまい、切ない想いが溢れる。

「紫音、……君が俺のことを何とも想っていないのなら、俺のことを突き飛ばすなり引つ叩くなりしろ。しないなら俺はこのまま君にキスする」

貴輝の強引な言葉に紫音は目を見開き絶句した。

貴輝の想いを受け入れるわけにはいかない。

近づく貴輝の顔を見つめ、紫音は拒まなければと思いつつも、震える手は彼の胸に置かれるだけで突き飛ばすことはできなかった。

言葉通り、貴輝は紫音に口付けした。

貴輝の想いを直に感じ、紫音の閉じた瞳から涙が溢れ出す。

(……貴輝先輩が好き)

彼の胸に迫る熱いキスに、紫音は無意識のうちに彼の背を握っていた。

唇が離れもう一度貴輝を見た瞬間、紫音は我に返った。

「わ、……わた……し」

紫音は貴輝にウツトリしてしまった自分にうろたえた。

「私、……貴輝先輩の気持ちには応えられない！」

動揺する紫音。

貴輝は紫音の胸の内に抱える複雑な想いを悟った。

「……分かった。紫音の思うようにしたらいい。ただこれだけは覚えていてくれ。俺の気持ちは変わらない、と」

貴輝は紫音の手を取った。

「もう何もしないから、……帰ろう」

*

*

*

貴輝がインターホンを押すと、中から藤花が出てきた。

「紫音どこ行ってたの？ 遅くなるなら連絡しなさい！」

藤花が言っている傍から、紫音は姉の顔を見ようとせす家の中に駆け込んだ。

「ちょ、ちよつと紫音!!」

「藤花先輩、紫音を怒らないで欲しい」

「あ……貴輝くん、ありがとう。将斗くんにもお礼言っというてね」

「お礼だなんて……。今日のことは俺に責任があるんだ。……俺が紫音に告白したばかりに、彼女の気持ちを追い詰めてしまった」

貴輝は自責の念にかられ、唇を噛み締めた。

（紫音はきつと俺の想いを知りたくなかった。自分の心も俺に知られなくなかったんだ）

自分の告白が彼女の心の歯車を完全に狂わせてしまった。しかしこれ以上自分の想いを隠しておくことができなかったのだ。

「紫音は他人思いの子だから……」

藤花は淋しそうに呟いた。

「じゃあ俺、帰るよ」

「そうね。もう遅いし、気をつけてね」

「ああ」

藤花は貴輝を見送ると家の中に戻り、そのまま紫音の部屋をノックする。

紫音は部屋の中で制服のままベッドに倒れるようにしてうつ伏せになっていた。

「紫音、夕飯は？」

「……………いない」

「そう。……………ちょっと話があるの。入るわよ」

ドアの開く音がした瞬間、紫音は反射的にドアに背を向けるように向きを変えた。

藤花を前に、紫音は一瞬でも貴輝の想いを受け入れてしまったことで自己嫌悪に陥っていた。

藤花は互いに背中を向き合わせる形で、ベッドの端に腰掛けた。

「ねえ紫音。私が貴輝ちゃんと別れたのは、留学するためでも、まして紫音に気兼ねしたからでもないの。付き合い始めて少しした頃から、私達お互いにもう前のような気持ちではないって気づいてたの……………憧れに変わっていたのよ。だから紫音、私のことは気にせず貴輝くんに想いを伝えていいんだよ」

藤花は紫音の頭を慰める様に優しく撫でた。

紫音は藤花の本音を聞いてやっと二人の別れた訳を理解した。と同時に藤花だからと貴輝への想いを抑えこもうとしていた理由がな

くなり、自分の気持ちをどう処理したらいいのか持て余す。

藤花も貴輝もどんどん前を見て進んでいって、自分だけが取り残されている気がした。

「……どうして私、お姉ちゃんに生まれなかったんだろう。お姉ちゃんみたいになれたら、私だってもっと自分に自信持てたのに。貴輝先輩の想いだってちゃんと受け止められたかもしれないのに……」

「紫音は私が自信あるように見える？……私だって臆病になる時だってあるのよ。特に新しいことを始める時はいつもそう。私、得意不得意がはつきりしてるでしょ？始める前はどっちに転がるか不安なの。だから逆に私は紫音が羨ましかった。何でも器用にこなしちゃうんだもの。昔やってた習い事も得意のピアノ以外は全部紫音の方が進んじやって、私紫音を妬んだことすらあるのよ」

紫音は起き上がり、意外な顔をして姉を見つめた。

藤花は優しい笑みを返す。

「人間ってないものねだりよね。何でも人の方がよく見えてしまう。……紫音、まずもつと自信を持ちなさい。自分が強くなれば、相手の痛みもちゃんと受け止められるから。将斗くんにきちんと自分の本当の気持ち伝えるのよ。このまま自分の心に嘘ついて付き合っていたら、自分だけじゃなくて将斗くんの心ももつと深く傷つけてしまうのよ。……もちろん貴輝くんの想いにも正面から向き合っの。いいわね？」

「お姉ちゃん……」

十六年姉妹として過ごしてきて、紫音は姉とこんな親密な会話をしたことはなかった。

姉に長所があるように、自分にも長所があったことを初めて実感した。

しかしすぐには自信など持てなかった。

今の自分に誰かを傷つけてまで何かを得る、その責任を背負う心の強さがまだないことを紫音は分かっていた。

*

*

*

『紫音ちゃん、今から屋上に来てくれるかな？ 話があるんだ。』

放課後、紫音の携帯に将斗から連絡が入った。

いつもと変わらない将斗の声。だが昨日のことはすでに将斗も知っているはず。

話とはそのことなのだろうと紫音は思う。

「……………はい」

今将斗と二人で会うのは正直怖かった。行きたくなかった。

藤花の言ったように、将斗に嘘をついたまま付き合っていていいはずがない。

しかしこれまでの将斗のしてくれたことを思えば、彼の気持ちにできる限り応えていきたかった。

紫音は将斗に言うべき言葉が見つからないまま屋上へ向かった。

屋上の扉を開けると、将斗は手摺りにもたれ屋上からの景色を眺めていた。

紫音はゆっくり、だが真っ直ぐ将斗の元へ歩いていく。

「……将斗先輩」

声を掛けると将斗が振り返った。

いつもと少し違う心持ち緊張したような表情の将斗。でも優しい微笑みは今も変わらない。

「紫音ちゃん、部活前に呼び出してごめんね」

「……い……え」

将斗は紫音の様子を窺いながら再び外の景色へ目を向ける。

紫音も将斗に並んで手摺りに手を置き将斗の顔を見上げた。

「……昨日貴輝が君に告白したって聞いたよ。どうして貴輝を拒んだの？」

紫音は将斗の言葉に目を見開いた。

（将斗先輩は私の本当の想いに気づいてる……？）

驚く紫音を将斗は見つめた。

「どうして貴輝との思い出の場所の遊園地にいたの？」

その言葉に紫音ははっきり確信してしまった。自分の想いが知られていると。

将斗の淋しげに揺れる瞳を見ていられなくて、紫音は俯いた。

「君の本当の気持ちを教えて欲しい。今、心を占めてる存在は誰？」

知られていると分かっただけでも、紫音は何も言えなかった。

すべてを捨てる覚悟で将斗の胸に飛び込んだのに、結局自分がかつて貴輝が自分にしたことと同じようなことを将斗にしまっているのだ。心に想う人と違う人と付き合っただけで傷つけている。

紫音はその気持ちを痛いほど知っている。

それでも言えなかった。

今日までの日々、将斗にどれほど救われてきたか。恋ではなくても大切な存在に変わりはしないのだから。彼の気持ちに伝えたい思いは嘘ではないのだから。

将斗の手が優しく紫音の肩に置かれた。

「紫音ちゃん、はつきり言ってくれ。偽りでない君の本当の心を教えてくれ。それが今、君が俺にできるただ一つのことなんだよ。君は俺のことを思っ言えないのかもしれないけど、今本当のことを言ってくれるのが俺の気持ちに報いることになるんだ。だからちゃんと言ってくれ！」

将斗の覚悟はできていた。

紫音はそれを感じ、胸が痛かった。

（あんなに優しくかった将斗先輩を傷つけてしまったんだ。……でも言わなきゃもつと先輩を苦しめてしまう）

紫音は将斗のことを思うと、溢れる涙が止まらなかった。

「…………ごめんなさい。私、貴輝先輩を忘れられなかった。将斗先輩の優しさに甘えるだけ甘えてこんなことになってしまったてごめんなさい。でもあの時は本当に貴輝先輩を忘れられると思ったの。将斗先輩となら忘れられると思ったの。……でも心は理屈じゃなかった。忘れなくて苦しくて、それなのに貴輝先輩の姿を見るだけで声が聞こえてくるだけで、胸が熱くなるの、切なくなるの。でも将斗先輩のことが大切だったのも本当なの。恋にはなれなかったけど、とても大切なかけがえのない先輩だったの。それなのにこんな風に傷つけてしまって、どんなに謝っても謝り足りない！」

将斗は心静かに紫音の思いを聞いていた。

恋ではなくても彼女が自分をどんなに大事に思っていてくれたのか分かって、心穏やかに別れを受け入れられた。

「紫音ちゃん謝らないで。君の気持ちをこっちに向けられなかったのは俺にも責任があることなんだから。紫音ちゃんとの約束守れなかったのは俺なんだから。……俺は君と付き合えて嬉しかったよ。こっという時はありがとう、だろ？」

将斗は紫音に握手を求めた。

紫音は将斗の温かさに、その手を握って応える。

最後の最後まで変わらず優しく接してくれた将斗を、紫音は涙いっぱい湛えた瞳で見上げた。

「将斗先輩、ありがとう……」

その時将斗が向けた微笑みを、紫音は一生忘れないと思った。

将斗は思いを絶ち切るようにして扉部分の壁の陰に声を掛ける。

「貴輝、出て来いよ！」

将斗の放った名前に、紫音は反射的にそちらに目を向けた。

壁の陰から神妙な顔をした貴輝が姿を見せた。

貴輝と将斗はすでに昼休み、昨日のことで話をしていた。

貴輝から昨日の一部始終を聞いた将斗は、紫音の想いも、なぜ貴輝の想いに応えなかったのかもすぐに見当がついた。

そして紫音が自分からは本当のことを告げることはないと、他人

の思いを考え自分の心を押し殺してしまうだろうことも分かっていた。

だから紫音を呼び出し、それを貴輝に聞かせたのだ。

将斗にとって紫音も貴輝も大切な人だからこそ、将斗は二人のためにこの場をセッティングしたのだった。

近づいてくる貴輝の方へ、将斗は紫音をそっと押し出した。

「もう泣かせるなよ」

貴輝も親友の思いに応えるようにしっかりと頷く。

「ああ。もう二度と悲しませるようなことはしない」

将斗はその言葉を受け止めると、紫音をもう一度見つめた。

「紫音ちゃん、もうこいつの手を離すんじゃないよ」

将斗はそれだけ言うと、その場を去って行った。

最後に紫音は将斗の背に向かって叫んだ。

「ありがとう、将斗先輩！」

将斗は振り返ることなく、軽く手を振って屋上を後にしたのだった。

（ありがとう。先輩の優しさ絶対忘れないよ）

紫音は扉の方を見つめ続けていた。

「……紫音」

貴輝の声に紫音は彼を見る。

貴輝はそつと紫音を抱き寄せた。

「俺ともう一度やり直してくれるか？ もう二度と君に誰かを傷つけさせるようなことはさせない。君を傷つけたりもしない。将斗の分まで君のこと大切にしていくよ」

彼の胸の中で紫音は小さく、でもしっかりと頷いた。

紫音は今度こそ貴輝の想いに応えたのだ。

（もう逃げない。もう背を向けない。ちゃんと自分の気持ちも周りの気持ちも受け止められるよう強くなるよ。自信を持てるよう頑張るよ）

この恋が教えてくれたことを、紫音は胸に刻み付ける。

貴輝に手が優しく紫音の頬に触れた。

——紫音は皆の温かい思いに感謝し、そつと瞳を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3343i/>

藤の華・紫の影

2011年10月10日00時59分発行